



発行所
公益社団法人 国民文化研究会
(九州←東京←全国)
東京都渋谷区東1-13-1-402
振替 00170-1-60507
電話 03-5468-6230
FAX 03-5468-1470
<http://www.kokubunken.or.jp/>
E-mail: info@kokubunken.or.jp
月刊「国民同胞」編集部
毎月一回10日発行
購読料 年間2000円

日本人としての「まこと」を実感した合宿

—第六十九回全国学生青年合宿教室《主会場》開かる—

池松伸典

今年の「第六十九回全国学生青年合宿教室《主会場》」は、東京都八王子市の大学セミナーハウスにおいて二泊三日の日程で開催された。案内パンフレットには、例年と同じく「祖国・学問・人生を語ろう！」の言葉を掲げた。

調べてみたら、この言葉は戦後二十年を経た昭和四十年頃からの「合宿教室」でよく出てきてゐる。昭和四十年と言へば、前回の東京オリンピックの翌年で高度経済成長の最中であつた。自国の歴史を顧みることも、新しい時代の到来を歓迎するかのやうに世の中が躍らされてゐて、「祖国・学問・人生」といふやうなテーマについて真摯に向き合ふことが少なくなつてゐたのだらう。

利になり、情報技術は格段に発達して手軽に多くの情報が得られるやうになる中で、文字離れが進んで書籍も読まれなくなつた。そのうへグローバル化の名の下で、小学校教育に英語が導入されて肝腎の国語力の方は大丈夫なのかと懸念さへ覚える状況である。

かうした中で開催した今回の合宿教室では、御多分に漏れず、参加の呼びかけでは苦労した。だが、合宿教室を終へた今、その意義が改めて重く感じられるのである。

開会式では冒頭で、すべての祖先の御霊に対して一分間の黙禱が捧げられた。小柳志乃夫理事長の開会の挨拶では、「先人と深く付き合ふこと、自分との関はりの中で歴史を見て行くことが疎かになつてきてゐる」と今日の問題点が指摘された。開始早々、参加者

は自らの前に立ちほだかる大きな課題に出会つた。引き続き合宿導入講義で私は小林秀雄のエッセイ「美を求める心」を紹介しつつ、学問に取り組む根本的な姿勢について拙見を述べた。次の國武忠彦先生は、「話し言葉はあつても文字がない時代に漢字が伝来して、そこから仮名表記が生まれるまでの漢文との苦闘」と、古代人の言語観、言霊について語られた。

二日目最初の青山直幸氏による短歌導入講義では、「日本人は短歌を通して心を磨き、情意をはぐくんで来た」として、古代から歌ひ継がれてきた短歌の歩みが紹介された。続く濱口和久先生の講義では、危機に処した先人の智慧が語られ、我が国および国民自身に共通する危機意識の欠如といふ

防災上の今日的課題が指摘された。そして招聘講師の松浦光修先生は「幕末の志士に学ぶ—その死生観を中心に—」と題されて、個人を超えた永遠なる命を確信してゐた志士の生き方をその遺された「言葉」に辿られた。「天」とは何か、「死」とは何かを深く考へさせられる御講義であつた。次の山内健生氏による講義では「日本の国柄」の独自性が具体的に示され、それを断たうとする内外の動きがあつて我が国がいかに危ふい現状

にあるかが語られた。

最終日、登壇の小柳理事長は昨春秋に本会編で刊行された『歴代天皇の御製集—九十五方の御歌を讀む—』（致知出版社刊）に触れつつ、ことに幕末期の孝明天皇の御製に大御心を仰がれた。連綿と続いてきてゐる皇統がいかに尊いものであるかが示された。

壇上からの数々のお話は何れも一言で語り尽せるものではないが、その内容は参加者にとつては大きな示唆となつたと思はれる。班別研修では様々な感想が述べられたことと思ふ。「朝の集ひ」での短歌の鑑賞は、他では体験し得ないものだったであらう。

樹々に囲まれ虫の声が静かに聞えてくる日常とは違つた環境での合宿は、日頃の自分を見つめ直す貴重な機会となつた筈である。この合宿で得られたものは、単なる知識ではなく、互ひに意見を交す中から生まれ出てきた日本人としての「まこと」を実感したことではないだらうか。一言でも心に残る言葉があつたり、うつつらとでも日本の美しい姿が心に映じてくるなら、本当に有難く嬉しく思ふ。難題を抱へた日本ではあるが、参加者の皆様と共に思ひをひとつにして前進したいと意を新たにしている。（副理事長、若築建設（株）